

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

——エチオピア・アディスアベバ大学、オロモ語、派遣期間(: H19. 12. 17- H20. 3. 17)——

平成 19 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 2 回生
田中 利和

自身の研究テーマについて

エチオピア中央高原付近に暮らすオロモの人々は、伝統的に農業と家畜の飼養とを結び付け、限られた土地で自給生産的な有畜農業をおこなってきた。彼らにとってウシは非常に重要な生活資源である。例えば去勢牛は、畑の犁耕作業や、収穫した穀物の脱穀(図 1)をおこなう際に必要不可欠である。雌牛が提供する乳製品は人々の食文化を支える重要な食品である。また人々にとって貴重な動物性タンパク質も提供している。牛糞は畑に有機物として還元されたり、天日干しして薪の代替燃料として利用したりもする。さらには、建築資材として用いられるほか、床を補修する材料(図 2)としても利用されている。エチオピアの農村研究においては、ウシの所有頭数が経済的な豊かさの指標としてもちいられることも多い。このようにウシは、オロモの人々の生活に深く関わっており、多面的な役割を果たしている。本研究の目的は、人々と家畜との間にみられる様々な関係に焦点をあて、在来の有畜農業システムを畜産学、農学、歴史学、人類学等さまざまな視点から総合的に検討し、その特質を明らかにすることである。オロモの人々が伝統的に行ってきた在来有畜農業の知識・技術を積極的に評価し、アフリカ型の持続的農業システムの可能性について考察する。



図 1. テフの脱穀の様子



図 2. 糞を家の補修材として用いている様子

研修言語の概要

オロモ語は、東クシ系に属している。エチオピアの公用語ではないものの、エチオピアの全人口（約7700万人）のうち、35%から40%（約2400万人）がオロモ語の話者である。エチオピアでは、80以上の言語が使われているといわれるが、その中で最も話者数が多い。またアフリカにはおよそ1000の言語が使われているが、オロモ語はアラビア語、ハウサ語についてアフリカで3番目に広く話されている言語である。

語学研修の内容について

研修の目標は、在来ウシ農耕システムに関する現地調査をおこなううえで必要なオロモ語の語彙や文法などの基本的な言語能力を身につけ、インフォーマントとの意思疎通をスムーズにできるようになることであった。アディスアベバ大学には、短期の語学プログラムがなかった為、社会学部のマモ・ヘボ博士に派遣者にあわせた語学研修プログラムをアレンジして頂いた。研修は次の2部構成でおこなわれた：（1）基礎的な言語能力習得のための大学でのマンツーマン講義（図3）（2）調査地での現地指導（図4）。



図3. 教室での授業風景



図4. フィールドでの語学指導

- （1）言語教育学専攻の先生に、1日3時間、週4日の割合でマンツーマン講義を行ってもらった。講義の解説は、オロモ語で行われた。オロモ語で説明をうけても理解できない場合は、英語で解説を加えてもらった。初期の段階では、基礎的な語彙と文法の初歩を学んだ。これと平行して、オロモ語の発音の仕方について専門的な指導を受けた。この段階では、聞き取り、書き取りを中心とした基礎言語能力を身につけることを目標に進められた。次の段階では、在来有畜農業についての調査をおこなううえで必要な語彙と基本的な表現を習得することに焦点をおいて講義が進められた。
- （2）自分の研究対象地に出向き、教室で学習した語彙や表現方法をフィールドにおいて実践的に使うなかで定着させた。またフィールドにおいて、研究を行う際に必要な質問方法や重要単語を、現地指導を受けるなかで見出していった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

大学でのオロモ語の講義を終え、自分の調査地で研修を行った時のことである。あるインフォーマントが私のフィールドノートを覗き込んで驚いた。「ゴーバスィダ(あっぱれだ)」と言って、尊敬のまな

ざしで私を褒め称える。私が、講義で学習したオロモ語の表記方法に従って記述していた事に驚いたようであった。不思議に思い彼にも記述をしてもらった。しかし私が学習したような表記法ではなく、間違いの記述が目立った。私が訂正してみせると、納得し興奮した様子で「もっと教えてくれ」と頼んできた。フィールドでオロモ語を学びにきている自分が、オロモ語を母語とする村の人にオロモ語の記述について教える。一方的に習うだけではなく彼らの言葉を用いて彼らにも教えることができたことは、フィールドでおこなわれている言語研修であるからこそ得られる体験であり、村の人とコミュニケーションをとりながら語学を学ぶことの意義を見出せる印象的な経験となった。

目標の達成度や反省点について

オロモ語の記述方式を用いて、聞き取り及び書き取りができるようになったことが第1の収穫である。このことで、フィールドで得られた情報を後で詳しく調べることが可能になった。2点目は、オロモ語の文法の基礎を体系的に講義で学んだおかげで、教科書を用いて自学自習できるようになったことである。3点目としては、フィールドにおいて調査アシスタントがいなくても、一人でオロモ語を使って必要な情報を収集できるようになったことである。このことは自分の意思を伝える力、そして相手の話を理解できる力がある程度備わったことであり、今回の研修の最大の収穫だと考えている。

しかし、研修終了段階ではまだまだ文法を正確におさえきれていない。その為、現段階で文法的に正確な文を自分自身で作成することは難しい。また、聞き取り、書き取り能力も完璧とは言えない。今後も実践と学習を通じた継続的な努力が語学習得には必要であると感じている。